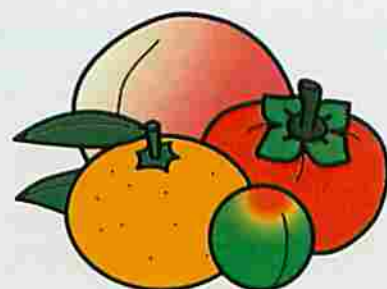


わかやま 果試ニュース



No.72(2008年7月)



(収穫期のウメ 関連 2, 3, 6, 8 ページ)

目次

- ウメの新品種「NK14」と「NZ22」(仮称)の特性
- 「川田温州」特性と新梢管理による結実促進
- カキ新品種「太天」「太月」の品種特性
- 高温土壤中での白紋羽病菌の死滅条件
- 有田かんきつフェア・西牟婁地方かんきつ栽培セミナー開催される
- カキ新品種「太天」「太月」試食会の開催
- 「機能性成分を高めるための家庭用ウメ加工マニュアル」を作りました
- 人事異動

和歌山県農林水産総合技術センター
果樹試験場
かき・もも研究所
うめ研究所

「川田温州」の特性と新梢管理による結実促進

果樹試験場 主任研究員 森口幸宣

川田温州は、浮き皮の少ない良食味品種として有田地域中心に植栽が始まっていますが、隔年結果性が強く栽培が難しいため本格導入はこれからです。特徴の1つとして減酸が進んでも味ぼけしにくいいため、一般的には甘味が強いまろやかな味と表現されます。酸味を好まない消費者がこの品種のターゲットと考えられます（市場調査(東京2007)）。

○特性

「宮川早生」の枝変わり種で、浮き皮の少ない中生品種。成熟期が11月中旬～12月中旬、予措すると年明け以降も出荷できる。

果皮は滑らかで、じょうのう膜は柔軟で薄い。LM果中心で糖酸のばらつきが少ない。

樹勢は強く、隔年結果はかなり強い。枝の分岐角度が狭く、生理落果が多い。



生理落果の原因と結実促進対策

これまでの試験結果から、TR率の高い川田温州は、①地上部を養うための十分な根量がない、②新梢の発生量が多い特性があるため春枝の緑化を遅らせ、生理落果を助長するものと考えられます。

そこで、結実を促進させる新梢管理試験として、新梢伸長を抑制するバウンティフロアブルの散布、新梢量を制限する芽欠き・摘心処理を行いました。

表1. バウンティ処理が新梢長、節間長及び結実に及ぼす影響

処理区	遠観		新梢長			枝先20cm調査法による着花数		結実率							
	着花量	新梢量	新梢長	節数	節間長	直花	有葉花	6/20			8/24				
								直果	有葉果	平均	直果	有葉果	平均		
B園(摘心処理)	5:基多~3:中~1:基小	cm	節	節	個	個									
バウンティ処理区	2.5	4.0	7.8	7.5	1.0	12.6	5.9	54%	26%	49%	37%	25%	37%		
無散布区	2.5	4.0	10.5	6.7	1.6	11.9	4.4	48%	35%	48%	35%	27%	36%		
C園(無処理)	4.0	2.0	8.6	8.8	1.0	13.7	3.9	30%	34%	30%	18%	22%	18%		
無散布区	4.0	2.0	11.1	7.9	1.4	24.2	3.2	22%	10%	19%	17%	2%	14%		

B園、C園:有田市階段園

バウンティ処理:新梢伸長が2~4mm時(B園4月2日、C園4月3日)に、250倍を樹全体に散布(1.25L/樹)

摘心処理:5月11日に約20cm以上の新梢を1/3~1/4に摘心

○バウンティフロアブルの散布効果

新梢長が無散布より2~3割、節間長が3~4割短くなるとともに果実の結実率が高まりました(表1)。

バウンティフロアブルの散布方法

散布時期-新梢発芽直前(1月下旬)~5mm以下(春期)
 使用量-250~500倍、200~300倍/10a、茎葉散布
注意点

連年使用するときは前年の抑制程度を考慮して使用
 散布直後に降雨があっても再散布しない
 新梢先端部中心、葉先から滴り落ちない程度に散布

○芽欠き・摘心処理の効果

着花数が少ないB園ではバウンティフロアブル散布の有無にかかわらず、結実率が30%以上、通常の約3倍程度に高まりました。

以上から、バウンティフロアブルの散布と芽欠き・摘心処理はともに結実率を高める効果が認められ、安定生産の1手法として活用できます。

花周辺の新梢摘心



新梢の剪除で群状着果



カキ新品种「太天」「太月」の品種特性

かき・もも研究所 主任研究員 小松英雄

「太天」「太月」は、(独)果樹研究所において「黒熊」×「太秋」の交雑により育成された品種(2007年10月命名)であり、当研究所では系統適応性検定試験としてこれらの品種の特性等について検討してきたので紹介します(両品種は不完全渋ガキです)。



(写真：太天)



(写真：太月)

品種特性

- 「太月」は10月下旬から11月初めに成熟し、果実は400gと大きく、果形は腰高、果皮色は橙黄色、糖度16度、果肉は柔らかく多汁です。
- 「太天」は、11月上旬に成熟し、果実は大きく、果形はやや扁平、糖度17度、果肉は柔らかくて多汁で、「太秋」に近い食感があります。
- 両品種とも開花期は「富有」とほぼ同時期で、雌花着生が多く、結実が安定しており、栽培容易な品種です。脱渋は容易であり(表4)、9月下旬の樹上脱渋により果肉に褐斑が入り、食感の良いカキに仕上がります(表5)。

表1 生育状況

	展葉期	開花盛期	雄花着生	収穫盛期
太月	4/8	5/20	無	11/3
太天	4/8	5/18	無～少	11/7
富有	4/8	5/20	無	11/16
平核無	4/2	5/13	無	10/26

注) H16～19年、4ヶ年平均値(日13年高接ぎ、各3樹)
表2、表3についても同じ

表4 脱渋性(2007年)

	タンニンプリント示度			
	脱渋 2日後	3日後	4日後	5日後
太月	3.0	4.0	5.5	6.0
太天	2.0	3.0	5.5	5.5

注) タンニンプリント示度は1未脱渋、3やや脱渋、5ほぼ脱渋、6完全脱渋(CTSD脱渋は25℃24H、25℃で保存)

表2 果実品質

	平均果重 (g)	果皮色 (果頂部)	糖度 (Brix%)	果肉硬度 (kg/cm ²)	含核数 (個)	果肉褐斑 の多少	日持ち性 (日)
太月	422	4.9	16.2	2.5	2.8	種子周りのみ	9
太天	406	4.9	17.4	3.5	3.3	種子周りのみ	30
富有	297	5.8	16.1	6.1	3.1	中	20
平核無	259	5.1	15.4	6.2	0	無	12

注) 果皮色はカキカラーチャート値、糖度はCTSD脱渋25℃24H、脱渋4日後に調査(富有は収穫時)

表3 障害果の発生果率(%)

	汚損果	条紋発生 程度	果頂 裂果
太月	55.5	多	11.3
太天	33.5	中	5.0
富有	0.2	無	7.0
平核無	0	無	0

注) 条紋の多は70%以上、中は30～70%
の果実に発生するもの

表5 樹上脱渋の処理時期と果実品質(2007年)

	樹脱 時期	果皮色 (果頂)	糖度 (Brix%)	果肉硬度 (kg/cm ²)	果肉褐斑 の有無	含核数 (個)
太月	9/22	4.4b	16.4b	4.5b	有	2.6a
	10/20	4.3b	16.3b	2.9b	種子周り	4.4a
太天	9/22	5.1a	17.7a	5.4a	有	3.9a
	10/20	4.9a	17.4a	3.3ab	種子周り	3.5a

注) Tukeyの多重比較により、異なるアルファベット間には5%の
有意差あり

栽培上の留意点、課題

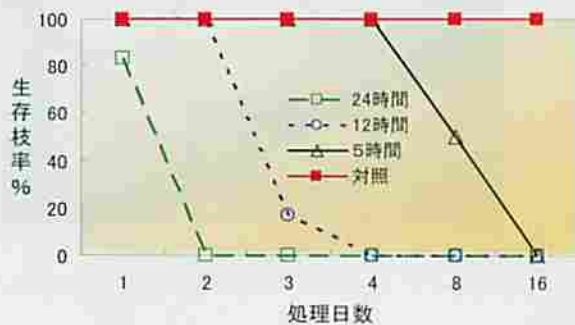
果実に種子が入るとその周辺の果肉に褐斑が入り、食味に影響するので無核栽培の検討や汚損果、条紋の発生を軽減させる樹冠下マルチ、摘葉などの対策が必要です。

高温土壌中での白紋羽病菌の死滅条件

うめ研究所 主任研究員 島津 康

再発しやすく、防除の難しいウメ白紋羽病の改植時の防除法として夏期の太陽熱を利用した土壌消毒が考えられます。そこで、高温の土壌中での白紋羽病菌の死滅条件を把握するため、高温の持続時間、土壌の種類、土壌水分と死滅までの日数の関係を検討しました。

35℃持続時間と培養枝中の白紋羽病菌死滅までの期間



24 時間中 12 時間 35℃とした土壌中の白紋羽病菌は4日で死滅



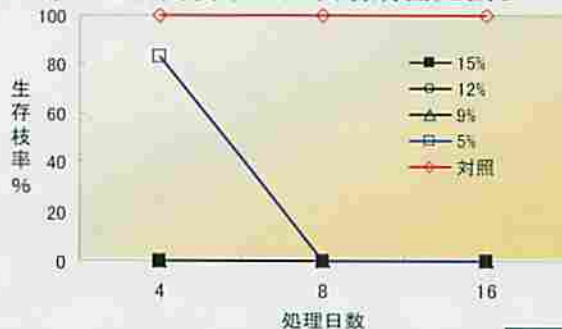
褐色森林土、岩屑土、黄色土、灰色低地土のいずれでも同じ結果

24 時間中 12 時間の間土壌温度 35℃となる条件が4日連続すると白紋羽病に対する防除効果が期待できます



高温土壌に埋めた培養枝からは白紋羽病菌糸が発生しません

土壌水分率と培養枝中の白紋羽病菌死滅までの期間



24 時間中 12 時間 35℃とした場合、最大土壌水分率の90～50%以上では4日、30%では8日で死滅

土壌の高温処理による防除効果を高めるには、最大土壌水分率の50%以上の水分を含むことが望ましいと思われます

現在、夏期の土壌表面のビニール被覆による防除効果を検討しています

有田かんきつフェア・西牟婁地方かんきつ栽培セミナー開催される

平成20年2月11日に有田川町のきびドームにおいて第4回有田かんきつフェアが開催されました。当日は田辺市ふるさと自然公園センター鈴木和男先生より「野生動物の生態と被害対策」と題して、鳥獣被害の実態と対策についての基調講演がありました。また、JAありだより1課題、有田振興局農業振興課より1課題、果樹試験場より2課題、計4課題の研究成績発表を行いました。

また、初めての試みとして西牟婁地域でのセミナーを実施し、果樹試験場より3課題の成果発表とJA紀南から1課題の情報提供を行いました。

いずれも参加された生産者の方からの積極的な質問もあり、有意義な成果発表会となりました。



カキ新品种「太天」「太月」試食会の開催

平成19年11月12日にかき・もも研究所において、カキ新品种「太天」「太月」の試食会を開催し、カキ主産地である紀北地域の技術者約20名が集まりました。品種特性、脱渋性、栽培上の留意点について説明のあと、試食していただき食味や食感などについてアンケート調査を行いました。参加者からは「太秋」に近い食感がある、「果実が大きい」などの意見が寄せられました（品種の詳細については研究の成果を参照のこと）。



「機能性成分を高めるための家庭用梅加工マニュアル」を作りました

うめ研究所では、県工業技術センター、近畿大学、社団法人農産物加工研究所とともに、和歌山県戦略的研究開発プラン事業「ウメの保健機能増進技術の開発（平成17～19年度）」で、ウメの健康パワーを高めるための研究を行ってきました。研究テーマは「栽培・加工技術による機能性成分の向上」、「 β -カロテン含量の高い新品種の育成」、「ウメに含まれる抗酸化物質の特定」、「新たな科学的効能の探索」です。このうち、「栽培・加工技術による機能性成分の向上」の研究テーマで得られた成果を編集し、平成20年2月に「機能性成分を高めるための家庭用梅加工マニュアル（15ページ）」を作成しました。内容は梅酒、梅干、梅ジュースについてです。詳しくは、うめ研究所までお問い合わせください。

